

## 日蓮聖人のお言葉

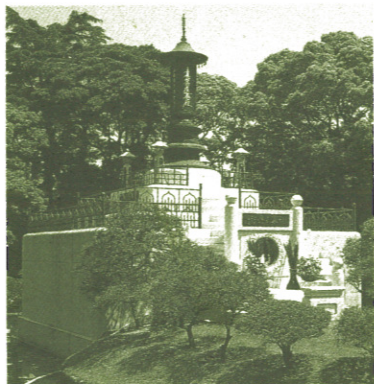
日蓮幼少の時より仏法を学び候ひしが、念願すらく、人の寿命は無常なり、出づるいきは入るいきを待つことなし、風の前の露なほ譬えにあらず、賢きも愚<sup>はかな</sup>きも、老たるも若きも、定め無き習ひなり。されば「先ず臨終の事を習うて後に他事を習ふべし。」

— 妙法尼御前御返事 —

## 妙宗大霊廟

法華経を形にあらわした理想のお墓

世俗の身分や貧富の差別なく、人はみな平等に、十界互具して一塔に合安。絶えない祭祀に安住する妙宗大霊廟。



■本誌発行・お問合せ先

132-0024 東京都江戸川区一之江6-19-18

国柱会本部・妙宗大霊廟

TEL: 03(3656)7111

FAX: 03(3656)9980

## 国柱会のお葬式

宗教法人 国柱会

## 仏式によるお葬式の意義

身近な人の死に遭うほど、この世に悲しい出来事はありません。それで一般の人は亡き人をしのび、霊を弔い、遺族を慰めるお別れの儀式が、葬式だと思っています。

仏教による葬儀は、それだけではありません。必ず信仰する帰依の対象の御本尊をおまつりし、その仏前で、亡き人に戒名を授けて仏弟子とし、お経を誦読して仏様の説法を聞かせ、導師がさとり言葉を与えて仏様の世界に引導するのです。それによって亡き精霊は菩提を増進し、仏法の世界に安住されます。成仏されるのです。

送る遺族も、弔問する人々も、別れる悲しみを超えて、法悦のありがたさに浸りまします。そして亡き人から与えられた仏縁を尊く感じて、追善回向をささげるのです。

大昔の日本人は、死を穢れたものと忌む風習があり、今でも火葬場から帰ると清めの塩をまくところがありますが、それは仏教とは全く無関係です。死という厳粛な出

来事を通じて、仏教の慈悲の大因縁を頂くのですから、葬儀は尊い仏事です。

## 国柱会の本化正葬儀

国柱会は本化妙宗を信奉しております。本化とは日蓮聖人のこと、妙宗とは妙法蓮華經の宗旨、すなわち法華經を信仰する宗教です。法華經は昔から多くの仏教徒にあげられてきましたが、日蓮聖人は、教主釈尊の御心のままに法華經を信じ、その子言通りに本化の菩薩として日本に出現し、法華經の真髓を、一切の人に授けて下さいました。それが本化妙宗です。

国柱会の葬儀は、本化妙宗の教えにもとづく葬儀で、本化正葬儀と称します。教えの上からも、儀相の上からも、これ以上の尊い、深い内容のこもった葬儀はありません。最高の儀礼として、在家仏教の同志がまごころこめて、厳粛莊重に営みます。

## 国柱会では数珠を使いませぬ

数珠は念珠ともいい、仏様を礼拝する時に手にかけて、揉んだり、念仏など唱える数をかぞえるために用いました。珠の数が百八個または百十二個など、それぞれに意味づけをしていますが、現在ではお葬式や法事に参列する時のアクセサリーになっているようです。指や掌にはさむ数珠は正しい合掌ができません。ですから数珠は用いなくてもよいのです。国柱会の法要儀式では、式中は厳正に合掌します。

## 在家仏教による合掌の生活

国柱会は、日蓮聖人の立正安国の精神を体して、世界を平和な仏国土にするという法華経のおしえを信奉する在家仏教の教団です。国柱会の在家仏教主義は、大乘仏教の教理の正当な主張にもとづくもので、その信仰修行の場は、日常生活にあり、とくに家庭を中心とすることにあります。田中智学先生は在家仏教の本義を立てられ、模

範教会同盟・在家仏教教団国柱会を、明治十七年に創立しました。明治二十年に日本で初めての宗教結婚式（法華経による本化正婚式）が制定され、人生の意義を充実する正しい指針が与えられました。国柱会は、家庭を信仰の道場として、夫婦親子が互いにおがみ合う合掌の生活を営み、みんなといっしょに幸福になる教団です。

## 忌日・年忌の追善法要

死後、七日ごとの七回と百ヶ日忌、一周忌、三回忌、その後の三、七の数にあたる年忌に追善供養すれば、よい果報に恵まれるといわれ追善法要が行われています。

追善法要は、故人や先祖の霊に対する感謝・報恩の気持ちから供養しますが、本来の意味は、御本尊・仏様から頂く功德をたむけ回向して菩提増進を祈るところにあります。私たちは、毎日の御修行の中で、追善回向の祈りを修しています。しかも我が家の先祖ばかりでなく、「願わくはこの功德をもって、あまねく一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」と一切衆生すべてに回向します。

## 本化正葬儀差定（式次第）

開式宣言（式中は合掌して下さい）

道場観  
奉請  
禮拜

道場を浄め、雑念を去り、身心を整える。法華経如来神力品の要文を唱える。御本尊をお迎え申しあげる。法華経見宝塔品の要文を唱える。

三秘禮といい、本門本尊・本門戒壇・本門題目、すなわち本仏のさとりの内容たる三大秘法に帰依を捧げる。仏のみあしを頂く五体投地頂足の礼を行う。

末法における法華経の修行をたたえ、信行のいみを明らかにする。

妙法蓮華経の要品を拝読し、本仏のみ声を聞く、要品は方便品、三徳偈、久遠偈。

讃歎  
読誦  
表白

第一助式が御本尊にこの葬儀の趣意を述べ、亡き精霊の法华経歴を言上して、精霊を寂光の本土へすみやかに導きいただくことを仰願する。

開棺

第二助式が葬儀参列の大衆に向って、大要つぎの宣言を行う。

「この道場は宝塔が湧現し、仏がお出ましになつて荘厳きわまりない。仏のみ声を亡き精霊とともにありがたく聴聞するように」。

教訣

精霊に対する式長による引導、大導師が仏になり代わつて成仏の直道を説法し  
仏意を奉じて臨終正念の教えを諭す。

證明

第一助式の発唱で見宝塔品の要文を唱え、教訣の御教えは、すべて真実である  
ことを証明する。

正修

成仏の唯一の修行すなわち「南無妙法蓮華経」のお題目を至心にお唱えする。  
身・口・意の三業に仏智を受持し、本因本果の大利益を頂く。

回向

成仏修行の志を表白し、仏祖への報恩謝徳の誠を捧げ、願業成就の祈りをこ  
める。式長（導師）は深心の表白として精霊回向文を読み、精霊の菩提増進を

一同とともに祈念する。

発願

法華経菓草喩品における仏が衆生を救う誓いのことばを、そのままわれらの誓  
いとして唱える。

帰依

本門三宝尊に帰依し、自ら妙法戒の受持をお誓いする。唱えおわつて帰依の誠  
心をこめ、仏のみ足を頂く頂足の礼拝を行う。

奉送

御修行の目的を達し終つて、寂光の本土にお還りになる御本尊をお見送り申し  
あげる。